

牧師室から (2021.10.24)

先日、コロナで一年延期されたショパン国際ピアノコンクール(5年おきに行われる)において、日本人が2位と4位に入賞したのは快挙であった。とは言え、小生は同国の人を応援しているというわけではないが、アジア系の人々が優勝したり入賞したりするのが増えているのは頼もしいことだと思っている。

近年この有名なコンクールに対して、ピリオド楽器によるコンクールも行われるようになった。ピリオド楽器というのは、その作曲者が使っていた古い時代の楽器のことであり、それを弾くことによって、かつてのような天才たちに与えられたインスピレーションが得られるのではないかというようなものである。これについては賛否両論あるので、門外漢の小生が口出しすることはおこがましいだろう。ただあるピリオド楽器奏者が、現代の楽器は、例えていうなら蒸留水で、ピリオド楽器は砂利や浮遊物のある川の水だと言われたのを聞いた時、これはある程度的を射えていると思った。音質の面から言えば、現代の楽器の方が洗練されていて、古いものは不純物が多いと言えるかもしれない。

小生の十代の頃はまだレコードであったが、その後CDが発現した時、そのノイズのないクリアーで、ドライな音に驚いたものである。でも今になっては、プチプチというノイズの入っていてモワァをした優しいレコードの音質が懐かしくなる時がある。

現代社会においては多方面でデジタル化が進んでいる。小学生にはコンピューターの授業が課せられているし、政府にデジタル相ができてから大分経つ。しかしデジタル化が進むことによって、曖昧な人間的な感性からは遠ざかっていくとは言えるかもしれない。

かつて、遊び心で、実験室の蒸留水を飲んでみたことがあったが、それは美味しくなかったことを思い出した。(実験室の試薬は絶対に口にしないでください。)

最後に誤解の無いように言わせて頂くが、小生は懐古主義ではない。もう少し正確に楽器を水に例えるなら、デジタル楽器は混じりけのない蒸留水、現代のアコースティック楽器は少し不純物を含んだ泉の水、そして古楽器は色々な不純物を多く含んだ川の水ではないかと言いたいのである。

(鈴木淳一牧師)